

意味変化における再分析の役割

- 複合動詞「V+こむ」を事例に -

複合動詞「V+こむ」の中には、以下のように用いられる例がある。

- (1) a. さらにレベルアップを目指し、冬場は体を鍛え込んだ。
(『朝日新聞』2002年3月30日、朝刊)
- b. 生徒たちは、顔が映り込むほど講堂の床を磨き込んだ。
(『朝日新聞』2005年2月26日、朝刊)
- c. 北京に向けフォームを改善し、泳ぎ込んだ。(『朝日新聞』2008年9月7日、朝刊)
- d. 曲のイメージをつかむため、ひたすら歌い込みました。
(『朝日新聞』2007年10月29日、朝刊)

(1)で用いられている複合動詞「V+こむ」は、‘(目標とする状態に到達するために)反復的にVの行為を行う’という意味(以下では、‘反復の意味’で指す)を表している。先行研究(cf. 姫野(1999), 松田(2004))では、反復の意味の獲得のプロセスとその動機づけが検討されていない。本研究では、反復の意味が獲得されるようになったプロセスとその動機づけを明らかにする。

反復の意味を有する新しい構文スキーマが形成され、用いられるようになったのは19Cに入ってからである。[表1]で括弧に入っている例は、新しい意味が定着する前の段階の例として挙げたものである。

[表1]

18C	(教え込む、覚え込む、習い込む、勧め込む)
19C	(頼み込む) 聞き込む、鍛え込む、磨き込む、拭き込む、使い込む
20C	読み込む、書き込む、投げ込む、走り込む、泳ぎ込む、歌い込む、洗い込む、食べ込む、歩き込む等

反復の意味と関わる構文スキーマが定着する前に登場した前段階の例(「教え込む」、「覚え込む」、「頼み込む」等)は、次のような状況と関係していると考えられる。

- (2) a. ((太郎は{生徒}に{基本的なルール}を教え込んだ) / (太郎は{基本的なルール}を{生徒}が習得できるように教えた))
- b. ((太郎は{生徒}に{基本的なルール}を教え込んだ) / (太郎は{基本的なルール}を{生徒}に何度も繰り返し教えた))

(2a)は、話し手の発話と意図を、(2b)は、聞き手が聞く発話と解釈を表している。聞き手は、話し手の意図に縛られることなく、状況に応じて様々な解釈を行っている。聞き手が、以上

の発話を聞いて、[太郎は{基本的なルール}を{生徒}に何度も繰り返し教えた]と解釈した可能性は十分に想定できる。ここで、‘何度も繰り返し’の解釈は、言語形式の「～こむ」に対応する。

以上のようなオンラインコミュニケーションにおいての話し手の意図と聞き手の理解のズレ（あるいはオフライン上での聞き手の二次的な解釈）が頻繁に起きることによって、後項動詞「～こむ」に新しい意味、反復の意味が与えられるようになったと思われる。Queller(2008)は、このような再分析のプロセスを‘semantic backformation’¹と名付けている¹。話し手の意図と聞き手の理解のズレは、少なくとも 18C・19Cに用いられるようになった「教え込む」、「覚え込む」、「習い込む」、「勧め込む」、「頼み込む」などの表現に関しては十分考えられる。つまり、(3)で例示されているように、内部への移動の意味だけを表していた「V+こむ」が、(3b)のように内部への移動の意味としても、反復の意味としても解釈できる中間段階を経て、反復の意味を有する新しい構文スキーマが抽出されるようになったと考えられる。

- (3) a. 太郎は干してあった洗濯物を部屋の中に取り込んだ。
b. 太郎は生徒に基本的なルールを教え込んだ。
c. 花子は試合に備え、泳ぎ込んだ。

反復の意味を表す「V+こむ」において、前項動詞は、学習やトレーニングのようなドメインを持つ表現に限られる傾向が強いことが観察される。このような観察を基に、前項動詞としてくることが可能であろうと考えられるいくつかの表現を後項動詞「～こむ」と結合させて、確認してみた結果、前項動詞として、「歩く」、「登る」、「踊る」、「漕ぐ」、「解く」等が実際に用いられていることが分かった。このような新しい拡張例を観察することで興味深いと思うのは、必要に応じて、[[V+こむ]/[(目標とする状態に到達するために) 反復的にVの行為を行う]]という上位スキーマからの事例化が起きている点である。

- (4) a. 腰の筋肉を鍛えるべく、野山や海岸を歩き込んだ。
(『週刊アエラ』2006年9月18日)
b. 最近の松平さんは踊り込んでいて、ますます円熟味が増していますよね。
(『朝日新聞』2005年2月27日、朝刊)
c. センターの勉強法で1番いいのは、短期間により多くの問題を解き込むことです。
(<http://questionbox.jp.msn.com/qa1003898.html>)

以下の(5)の「やり込む」の場合に至っては、その目的性が薄れてきている。

- (5) 最近はプレーする時間がなかなかなくて、ごぶさたしているけれど、長い間、TVゲーム機やゲーム・ソフトに関してはオタクといっていいくらいやり込んでいた。
(『朝日新聞』2009年4月4日、朝刊)

¹ Queller による研究は、紙面の関係上、発表の際に検討する。

〈主要参考文献〉

- 菊田千春. 2008. 「複合動詞「V かかる」「V かける」の文法化」 同志社大学英語英文学研究 81・82 合併号. pp.115-165. 同志社大学人文学会[編].
- 姫野昌子. 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』 東京: ひつじ書房.
- 松田文子. 2004. 『日本語複合動詞の習得研究－認知意味論による意味分析を通して』 東京: ひつじ書房.
- 松本曜. 2006. 「語におけるメタファー的意味の実現とその制約」 山梨正明(編) 『認知言語学論考』 6: 49-93. ひつじ書房.
- 松本曜. 2009. 「複合動詞「～こむ」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」『語彙の意味と文法』 由本陽子・岸本秀樹(編) 東京: くろしお出版.
- 初山洋介. 2001. 「多義語の複数の意味を総括するモデルと比喻」 山梨正明(編) 『認知言語学論考』 1:29-58. ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論: 文法のゲシュタルト性』 東京: 大修館書店.
- Langacker, Ronald W. 2000. "A dynamic usage-based model." In *Usage-based models of language*, Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. 2006. Subjectification, Grammaticization, and Conceptual Archetypes. In: Canakis, Costas and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. 17-40. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Traugott, Closs Elizabeth and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Queller, Kurt. 2008. Toward a socially situated, functionally embodied lexical semantics. In *Body, Language and Mind*, Roslyn M. Frank, René Dirven, and Tom Ziemke (eds.), 265-300. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.